東京江戸歩き

金澤篤宏 写真

潮出版

東京江戸歩き

山本一力 著
金澤笃宏写真

山本一力

やまもと・いちりき

一九四八年高知県生まれ。
おもに時代小説を中心に執筆。
一九九七年『蒼龍』で
オール讀物新人賞を受賞。
二〇〇二年『あかね空』で直木賞受賞。
近著に『梅咲きぬ』『背負い富士』
『まとい大名』などがある。

金澤篤宏

かなざわ・あつひろ

一九五九年愛知県生まれ。
十九歳の頃から写真を撮り始める。
未知の場所に出かけては
美しい風景や物、人との奇跡のような
出会いの一瞬を撮る「旅」を続ける。
現在、さまざまな雑誌、広告等を舞台に、
美の瞬間を提示し続ける。東京在住。

小物写真協力　高橋　舞

東京江戸歩き

二〇〇七年四月五日　初版発行

著者　山本一力

写真　金澤篤宏

発行人　西原賢太郎

発行所　潮出版社

〒一〇二-八一一〇　東京都千代田区飯田橋三-一-三
電話　〇三-三二三-三〇-〇七八一（編集）
〇三-三二三-三三〇-〇七四一（営業）

ブックデザイン　鈴木成一デザイン室

本文印刷・製本　大日本印刷株式会社

© Ichiriki Yamamoto, Atsuhiro Kanazawa, 2007

Printed in Japan　ISBN978-4-267-01755-1

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。http://www.usio.co.jp

東京江戸歩き

東京江戸歩き　目次

深川　お手を拝借……家内安全、商売繁盛　〇〇六

千駄木　あの欅には白薩摩が似合う　〇一四

湯島　新旧が同居した町だった　〇一八

神田　鮨食いねえの店はどこですか　〇二二

浅草　かつて今戸には味わい深い銭湯があった　〇二六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

神楽坂　武家より女性が似合う町　〇三〇

日本橋　お江戸日本橋七ツ立ち　〇三四

小石川　黒澤明の『赤ひげ』を観てきた　〇三八

駒込　ドジなおのれにため息をついた　〇四二

隅田川　振り返れば勝鬨橋目の前には佃島　〇四六

月島　高知に、よう似ちゅうぜよ　〇五二

赤坂 江戸を見晴らすには絶好の高台 ○五六

銀座 照明の入った時計塔を眺めた ○六〇

品川 志ん生師匠が品川を南といった ○六四

新橋 初めてのパチンコ ○六八

上野 あのころはひとに酔っていた ○七二

新木場 川並衆には煙草がよく似合う ○八〇

千駄ヶ谷　力道山が試合をした体育館　〇八六

目黒　サンマは目黒にかぎる　〇九〇

泉岳寺　義士はふたたび山門を出た　〇九四

四谷　上智大学の土手も雪に埋もれていた　〇九八

再び深川　砂糖を売っていた薬屋　一〇二

あとがきのようなもの　一〇六

深川

お手を拝借……家内安全、商売繁盛

暖冬が言われ始めて、すでに久しい。

おもえば去年（二〇〇四年）十一月下旬の『三の酉』の真夜中もぬるかった。

「お手を拝借……家内安全、商売繁盛」

熊手を授かったあとの三本締めは、なによりの縁起ものだ。

深川に暮らし始めた十一年前から、我が家の酉の市は富岡八幡宮境内である。深川で初めてのお酉さまの深夜、半纏姿のおにいさんたちは熊手が小さいにもかかわらず、威勢のいい三本締めを見せてくれた。

あのときは、真っ白な息を吐いていた。

去年は、息が白く見えなかった。

冬は、ぜひとも冬らしくあってもらいたい。

いまの世の中、ぬるいことだらけだ。せめて冬は（寒くてつらいのには閉口するが）、凜とした『厳冬』であってもらわないと困る。近ごろの日本人のたががゆるんでいる

かにみえるのは、冬が寒さをなまけているからだと思えてならない。

わたしが高知でこども時分を過ごしたのは、昭和三十年代の前半だ。当時の高知にはモノがなかった。

電気・水道は赤貧暮らしの我が家にも通じていた。ガスはない。ゆえに、ことさら『火』を大事にした。

黒潮流れる高知でも、真冬の水溜りには毎朝、氷が張った。蛇口から出る水は、氷同然の冷たさだ。湯を使いたければ、ガスのない暮らしでは火熾(おこ)しから始めなければならない。それがいやで、こどもは寝る前に火鉢の炭火に灰をかぶせて、種火を残した。火が大事だということを、理屈ではなしに経験から学んだ。

路地も表通りも、舗装されてはいない。あのころの道は、土でできていた。

陽の当たらない湿った道には、霜柱が立った。こどもは、霜柱を踏み潰しながら通学した。履いているのは、薄いゴム底の粗末な靴だ。地べたの凍えは、やすやすと底を突き抜けて、つま先に食らいついた。

木綿の靴下など、気休め程度の暖かさでしかない。霜柱を踏み続けていると、つま先には痛みを感じた。それでもこどもは、踏み潰したときに感じるシャキッ、シャキッとした小気味よさを味わいたくて、わざと霜柱の立っている道の端を歩いたものだ。

濡れた手をきちんと拭かないと、たちまち手の甲にはひび割れ(あかぎれ)ができ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

た。
親が塗ってくれたのは薬ではなく、ただのワセリン。それでも塗らないよりはましだったし、存外、ひび割れには効き目があった。
放課後は、原っぱで遊んだ。大きな円を地べたに描き、思いっきり相撲をとった。飽きれば缶蹴り、もしくは飛び馬だ。どの遊びにも、道具は無用である。ひたすら動き、体温で身体を暖めた。
いわゆる『文明の利器』が行き渡っていない暮らしのなかでは、ひとは知恵と本能を駆使して厳冬に立ち向かった。
まことに嬉しいことに、深川の公園では真冬でもこどもたちが遊んでいる。とはいえ、鼻水をセーターの袖口ですすり、乾いてバリバリになったものを着ているこども……などは皆無である。なにより、鼻水を垂らしているこどもなどいない。
それでも、寒風のなかで遊ぶ姿を見ると、わたしは大いに安堵する。
陽だまりの八幡宮境内に立つ、半纏姿の年長者。背中には冬の木漏れ日が差している……。
冬が凜としていればこそ、陽だまりが美しい。
暖冬だと言われている昨今でも、深川には、まだその美しさが町のあちこちに残っている。

夏には蟬しぐれが絶えなかった

わたしがこども時分を過ごした場所のひとつに、高知市洞ヶ島がある。高知城を真南に見る小さな町で、寺社が密集した門前町でもあった。

家のすぐ裏手を、国鉄（現ＪＲ土讃線）が走っていた。その線路を挟んで、北と南の両側に神社があった。南は薫的神社、北は小津神社である。

どちらも境内には樹木が群れており、夏には蟬しぐれが絶えなかった。家からは小津神社のほうが近かったが、遊んだのは圧倒的に薫的神社が多かった。

境内には小高い丘があり、てっぺんまで石段が続いている。湧き水も出ていたし、鳥黐木も植わっていた。

この木の皮を剝ぎ、境内の岩のうえで叩くと、粘りの強いトリモチができる。それを木の小枝にくっつけて、メジロやスズメがとまるのを待つ。うっかり枝にとまった鳥は、足をトリモチにからみとられて飛べなくなる。

その鳥を鳥かごにいれて飼うというのが、当時のこどもの遊びのひとつだった。

境内には杉、椎、桜の古木が何本も植えられていた。丘の上には祠もあったし、池には真ん中が盛り上がった石橋も架かっていた。

境内の一角には芝居小屋が設けられていた。ときおり、土地の小芝居一座が興行を

うった。あるとき祖母に連れられて、芝居見物をした。
それまで身近なところで見た芝居は、学芸会の他愛もない演技のみだった。プロの芝居では、食事の場面ではほんとうにモノを食べる。それを目の当たりにして、芝居の中身よりも、役者が美味そうに食べる姿に驚いた。
縁日には、多くの屋台が出た。その日は母が、五円余計に小遣いをくれた。当時の五円には、なにを買おうかと迷うほどの値打ちがあった。
夏なら冷やしあめ。冬はあめ湯。いずれも、生姜の搾り汁をひと垂らしすれば、味がピリッと引き締まる甘い飲料だ。
あれこれ迷った挙句、結局わたしはこのふたつのいずれかを味わった。とはいえ、ほかにも食べたいものは屋台に溢れている。
「いっしょに行こうや」
「いや。行ったら、けんちゃんに取られる」
嫌がる妹を一緒に連れ出し、妹の小遣いを巻き上げてたこ焼きだのお好み焼きだのを買った、あの夜。
夏場の祭りに妹が着ていた、寸足らずの浴衣。手にしていた、朝顔が描かれたうちわ。
神社には、こども時分の思い出が詰まっている。

深川の富岡八幡宮は、町の中心に鎮座している。いわば、土地に暮らす者の鎮守様だ。

一九九四年から暮らし始めて、今年で十一年目である。越してきた当初はまだ保育園児だった長男は、四月で中学二年生になろうとしている。この町で生まれた次男も、桜の春には小学四年に進級する。

小学校から帰宅するなり、塾へと通う子がめずらしくない昨今。多くの町から、こどもの遊ぶ姿が失せた。が、深川の富岡八幡宮は、いまでもこどもの遊び場である。縁日には、物売りの屋台で賑わう。

半世紀近く前のわたしの姿を、境内に見出すことができるのは、僥倖（ぎょうこう）のきわみだ。

幸いにも、親の血をこどもは濃く受け継いでいる。

千駄木

あの欅には白薩摩が似合う

母が没したのは、昭和五十六（一九八一）年四月。すでに二十四年が過ぎたことになる。その母が健在だったころの話だから、かれこれ三十年も前のことといえようか。

亡母は呉服の仕立て職人で、技量は上級に属していたのだろう。呉服屋さんからは、常に極上の反物が母の元に回ってきた。手描き友禅を仕立てるときの彼女は、まことに誇らしげな顔つきで鋏を入れていたのを覚えている。

あれは気持ちよく晴れた、梅雨明け直後の午前十時過ぎだった。

「ひまやったら、根津やら千駄木やらいう町に連れていってもらえんやろうか」

滅多に仕事場には電話をかけてこない母が、めずらしく頼みごとをしてきた。

「昨日の夜、テレビで見た店に行ってみたい」

根津から千駄木にかけての町で、和紙製の便箋・封筒・ポチ袋などを商う店を紹介していたらしい。そこに行きたいというのが、母の頼みごとだった。

フリーランスのコピーライターだった当時のわたしには、時間はたっぷりとあった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com